

弔 詞

大正15年、五藤齊三さんが五藤光学を始められてから、既に半世紀以上の年月が流れております。天体望遠鏡を、全国の小学校・中学校の教材にしようというお考えであったと伺っています。五藤さんは、以来、我国における天文普及の原動力となって来られました。その普及活動は、実に巧みにその時機を計って、着実に成果を上げられました。アマチュア天文家の中に今でも伝えられている数々の逸話は、それを物語っています。昭和2年に起った水星の太陽面通過、昭和6年の小惑星エロスの観測会、昭和11年の北海道日食等々枚挙にいとまがありません。天体望遠鏡そのものにおいても数々の特許となった技術的研究を積み上げられました。両々、相まって有効口径58ミリレンズのウラノス号は、全国小・中学校の標準品となるに至りました。このような事は、単なる夢や理想だけでなく、着実な計画性のもとに、望遠鏡のように遠くを見透しながら、プラネタリウムのように広い視野を持って、生きて来られたからに他なりません。

戦後は、更に我が国の中小独立企業の代表として、世界に望遠鏡やプラネタリウムを輸出して気を吐き、一方



では町の中で民衆にとけこみ、時の流れを先取りして活動して来られました。そうした中で、日本の天文学の発展を助けるための御寄附をいただき、現在も毎年その恩恵をこうむって研究に励んでいる若い天文愛好家が育っています。この半世紀に及ぶ終始一貫した御尽力をたたえ、その御期待に沿うようはげみたいと思うものであります。

日本天文学会を代表し謹んで御冥福を御祈り致します。

昭和57年7月15日

日本天文学会理事長 川口市郎

五藤齊三氏を偲んで

古畑 正 秋

五藤齊三氏は1891年1月の生れであるから、91歳という高齢で天寿を全うしてこの7月に他界された。学校は高知の高等小学校を出られただけであるから、まさに立志伝中の人として大成されている。はじめ10年余りは高知の会社などに勤められていたが、1921年30歳のとき上京して日本光学工業株式会社に就職された。上京する2年前に念願の日本光学の8cm屈折望遠鏡を購入して天体観測に興味をもたれたとのことであるから、日本光学入社もそれが動機で望まれたと思われる。しかし、入社後同社は争議などの苦境になり、人員整理などのため、1926年に独立して五藤光学研究所を世田ヶ谷に設立された。当時は望遠鏡は年1台くらいしか売れなかったとのことで、先を見通して天体望遠鏡を安価に市場へ出すという計画をあえて進めたあたりに氏の事業家としての天与の才覚があったことと思われる。私が同氏に初めてお会いしたのは1937年学生のころであった。すでにかなり大規模に中小望遠鏡を製作しておられるようになってからで、世田ヶ谷の工場をときどき見せていただいたものである。氏の先見の明はみごとに当って、戦後の教育振興に加えて宇宙時代の到来と、五藤式望遠鏡はほとんど市場を長く独占して、天文普及に貢献されたことはここに記すまでもなからう。

1955年ころ五藤氏はプラネタリウムの製作を計画され

た。この話を聞いて私はそれが容易でない旨を伝え、内心危惧していたのであるが、同氏の熱意はその技術を克服して、それから5年くらいで大型のものに加え、多数の中型プラネタリウムの製造に成功されている。時流に乗ったとはいえ、とうてい私どもにまねのできない果断の事業家精神に私も驚いたほどである。プラネタリウムは望遠鏡とともに五藤光学の主要製品に成長している。

五藤氏が直接天文学に貢献したものとして、1936年の北海道日食において朝日新聞社と提携してフラッシュスペクトルの映画撮影に成功されたことがある。これは言わば教育的のものであるとは言え、世界で初めての企てとして内外で高く評価され、文部大臣賞まで受けている。

本会には1967年に百万円を寄附され、主として若手学者の研究費などに使われている。また賛助会員としても長く本会に寄与されている。1979年に出身地高知へ60cm反射鏡を寄贈されており、五藤記念天文台として研究及び普及に使われているなども、氏の天文に対する長い熱意の表われであろう。

先を見通す判断力のよさと、土佐気質でもあろうか不屈の精神で、ほとんど失敗するということなしに、長い生涯を貫いてこられたことは敬服に値するものがある。天文学の普及につくされた大きな功績を思い、心からご冥福を祈るものである。